

お水取りと顔見世

豊澤 幸平

「Die With Zero」（著ビル・パークンス）という本を何度か読んでいます。二〇二〇年に日本で販売開始、現在まで約五十万部販売されている。直訳すると「生きていくうちにお金を使い切る」であるが、人生で金と時間を最大限に活用するためのルール、人生で一番大切なものは思い出を作ること等を記載。

その他刺激的な話も多いが、私が共鳴する箇所は、「いつまでも子ども用プールで子どもと遊べると思うな」。どんな経験でも、自分にとって人生最高、最後のタイミングがあることを言いたいようだ。ここ数年、その教えを実践しようと心がけているが、昨年は三月に奈良・東大寺二月堂のお水取り（修二会）、十二月に京都南座の顔見世に出かけた。

両者とも非常に有名は行事であるが、訪問の機会にあらためて調べてみた。

お水取りの起源は天平勝宝四年（七五二年）、以降千二百七十年間、一度も中断されたことがない、春の訪れを告げる仏教行事である。目的は、人、国、社会の罪を仏の前で僧侶が代表して懺悔することや、国家安泰、五穀豊穡の祈願すること。二月堂の下にある若狭井という井戸から神聖な水をくみお供えすることから、お水取りと謂われている。多数の修行僧が大きなお松明を持ち、暗くなった東大寺のお堂の周りを走り回ると、その火の粉が見学客に降りかかるが、これが見学のハイライトである。

京都の顔見世は、正式名は吉例顔見世興行。江戸時代初期（一七世紀）から四百年ほど続いている年中行事である。顔見世の名前の由来は、昔の歌舞伎界は十一月に役者との契約更新で、十二月からこの役者が芝居に出ます、顔を見せますというお披露目をしたことが由来、町人文化や娯楽の象徴として定着した。有名な「まねき上げ」は、細長い黒地の板に白字で役者名を書き南座の正面に掲げたもので、役者を招く、観客を招く、福を招くことを意味する。

両者とも昔から一度じっくり訪れてみたかったが、遅ればせながら実現でき大変満足している。

（二〇二六年一月）